大東亜戦争

第 OA0052465 号

理塀繁太郎　殿

先の大戦における御労苦に対し心から慰藉の念を表し特別慰労品を贈呈します

平成 20 年 7 月 31 日

内閣総理大臣

福田康夫



記憶に依る大東亜戦争記

一、戦前

終戦後五十七年記憶をたどって経験記を綴る。

昭和十三年七月七日支那現在の中国と日支事変が始まった。当時日本は、支那大陸を一面にまわって戦争となり日本は日に日に軍事態勢は進んで行った、九月の第七師団には動員が下って村や町から若い男は一斉そろって召集令をうけ入隊し平時は二万人なのに五万人になっていた戦争に行く兵隊さんは実弾の入った鉄砲や大砲を、車力なんか抜けば青光するのをつけて師団回りを今の宮城公園を一休して駅前広場で一列になって進んで駅前広場で一休して家族や知人と最後の別れをして出征して行った。行く先は支那の戦場へ國民は手に手に日の丸の旗を振って万歳々々の声で別れる涙と共に汽車が発車動き出した時の万歳は一声で、声はかれていた、軍用列車は煙を吐いて見えなくなって行った

俺は多くの家から、4kmを知っている人又は従兄弟達を見送るのに何回もまた

戦争は段々ふかくなって日本軍は今日は明日はと勝つたと、進軍ラッパそして号外新聞で報じられた　真の頃は人はかりではない毎日可愛かって仕事をとってくれている農家の馬が大砲や荷物を運ぶのに戦場へ行ってくれた　家からは二頭行った家族の様なもの可愛かった

人の代金は当らそれなりが馬の代金は当らった

やがて北支那から中支南支又は奥地そして北は北京から陝州、南京、重慶と此の小さな国の日本が大陸へ日本の若い人達をと出征した所へ配地とそしまった、そうしている内に支那が仲々負けたと言はない、のは後押をしているアメリカ、英国があるからだと言い事になり日本は世界が平和になる為と言って文字通り戦争が始まった　之はそれまでの事変と言ってはいなく戦争なのだ

二、大東亜戦争開戦

吾邦の指導者が降伏しないのは他の國を占領
するの為には悪い國とそして吾邦を指導し
得ない不適な條件を付てくるのでやむなく
日本はドイツ、イタリヤと同盟を結んで米國と
英國に対して昭和16年12月8日ハワイの
真珠湾を米英に爆撃をした事に始まって
大東亜戦争が始まった
日本軍は北はアリューシャン島に軍を送り南方は
英國領マレーを占領、南方へと進軍フィリピン
ビルマ、シンガポール攻略、南方の島々全部占領
グアム島
硫黄島にも軍を送り海軍は全部これを
守りながら戦争した而し日本の力はそこまで
が最高であった当時國内の男は元気な
者はほとんど赤紙と言って召集令状が軍
からまたらきあれた時には今度にそうな親
を残して行かなければならない事には悲しい
と言って軍隊の中の警察官や軍規を守る
憲兵者を取締る仕事を以ていると恐ろ
しい兵隊が居た。

小学校を卒業するまでは農家の子供は
中学校に行かせてもらう子供は居なかった
小学校の時から農家と言うか親の手伝い
をするものと思っていたから
五六年生になったら色々と男は男の
仕事女は女の仕事を習い仕込まれ
ました。男の子は作業、女の子は飲事とか
弟や妹達の守をした。当時はどこの家で
も兄弟の五人や六人は普通だったから
昔の親達もそれなりに大変苦労をした
又爺さん婆さんのいた家の子供等は親に
まさるお世話になった。
十九才から農作業の合間に軍事訓練が
始まった。青年学校と言うものがあって
一年二年は「気を付け」「休め」「右向け右」
「前え進め」と号令によって団隊を指揮
される練習又高等科になると射撃
銃剣術訓練、精神教育、銃剣道、一通りの
軍になるべく勉強をさせられた。真夏の
30度以上からの行軍は全身が汗で乾いた
所がない。而し俺は志願して入る軍隊
まさか戦場とも知れないと頑張った。

三、入営初年兵教育

昭和十九年三月二日宮城県石ノ巻市の陸軍船舶工兵第三十四聯隊に入隊する事になった　入隊する時は家には弟達が五人もいるのに又雪がどけで農作業が始まるって言うのに子供が戦争に行くと思ったが其の時の親の気持は今の俺でも経験はない北海道から石ノ巻までまでまってくれた親は少なかった　同日入隊した猿神村から来ていた塚越さんもこれが親との最後になってしまった

八月には初年兵教育が終った　十隊四名残って同時入隊兵は全部南方戦場へ行った後からうわさを聞くと上陸しない内に輸送船がやられほとんど戦死したとの話し確実な話はまだ聞いた事はない

始めて見る軍隊生活色々聞いて覚悟はしていたが　先ずは日常生活に就いての説明された一回聞いたくらいで全部がわかる訳がない　而し説明は一回　後三日目班付兵長がお前等お客さんではないんだぞ、わかったか」とそれまた始まったと思った　それから設々回が云うと内務班の掃除、食事、実習一日中休は全く無い

当時俺等は二十才 日本人の三大義務は
兵役、納税、教育、があった 国の大事な
時に役に立たなければならないと学校で
いて満二十才に成ったら日本の男子は徴兵
検査に依って合格した者は平時で三年間
は兵役に服する義務があった 北の様子から
早く軍隊に入ると思い小学校受験したが
破れ その年に現役を志願したがレントゲン
検査で又外れやっとその年甲種合格として
戦車隊になることになった 乙種又は
丙種の者は必要に応じて召集される
前に戻って内務班生活をし 今の仕事をして
いる内に次の仕事を考へ其の用意を他人
に遅れない様にしなければならない それを
出来ずにいると「すとまろと」言われたら前へ行ったら
直立不動で立つ次に「歯をくいしばれ」「足を
横に開け」打たれるも口が歪で切れない様
又たをれない様にし置く 何発も来る
力一杯なので三発までは痛いが其の後は

ゴソゴソと言うだけで席からは あまり音が 終わらぼうとする 手拭を水にひたして押する それでもまだ まならうとひげ 手が痛のこと 殆ど殴られ 拷問したなと思うほう 薄暗い 班室で 週番士官が夜の点呼に廻って まる時には 夜明け方になって見えにくくして 置くそして「人員異常無し」と申告する 起床ラッパが鳴ったら 四五秒の先布をたたみ 服を着て短時間に整列しなくてはならない 古年兵の後ろの様では これもビンタの種 食事ともなれば 大きな膳の様な容器に 持ってきてセンソンに入るが 皆毎日の演習で 腹がへる 当番が飯をもる 自分の分は少ない 多く盛ると 皆の目が見ているので 茶碗に 押込む 他人の目ふわうとも盛るしかし仲々 苦労する お膳に入れた班長さんの食事は 自分の鼻の高さより高く捧げるまでして 運ぶ 鼻の息がかからない様に そうでも 班長さんも人間一生懸命やればわかって くれて 俺だけ悪い時は別だが 全員を受ける ビンタの場合なども良く「理屈お前何をそ いるんだ ある事をして当と言うたのに早くそうすれば」

と言われそんな事は聞いていなかったと思いたら
終うせて帰れば皆ヒンタの後おった事は何度か
当時の教育班長は自分の洗濯物を初年兵に
しろとは言はず班長同志が話し合って他の班長
が下士官室へ行った時にお前の班長が風呂へ今行
たと教えてくれる風呂を沸かして皆を流し
ますの号令と言ってし大騒物を拾ってもる
人間はゴマスリやオダテルと思われ損
とするはやはり理屈と言はず良く認められる
様努力が大切だ
俺は室外体を動す事は得意だったので
良く各個教訓等で模範にされてくる
悪かった初年兵から小さい足に大きな
古い靴をはかされ歩くも走るも大変言って
もなかなか事なかった。ある時競走をされ
た事があった。その時ちょと靴のひもをゆる
めて走った。靴が抜けて片足はだしで
走ったら「やっぱりおのとりさい靴と支度
しろ」と叱られた。多分訓練も厳しかった
他人に負けられないと思って皆寝て
いる間にそっと起きてトイレに行くふりで

外へ出て便所のがうろうろ
眺めて自分の姿を
映して二週間頑張ったら一端上手く
なった
話しが外泊した時は三日間留守になるから
理解頼むと言って外泊となるので すると俺は此の
期会は大切にしたいと思って紙に理解の印を押
して下士官室の班長の手箱に封印をして
後は誰の手をつけられないと思って頼まれた
から当然と思った
教育期間が終って部隊が編成される命令が
下った 中隊全員約三百名が一室に集合して
内野人事曹長より一名宛名前を職種
をたとえば鉄甲艇団員、装甲艇団員、決定
艇団員と言って流し呼ばれた俺の名前は何
時だ此の次と思って居る内に終ってしまった
変な事もあるものだこんな厳しい軍隊の
命令に間違はあるものかと思っていたら
之で終ったのが今名前を呼ばれなかった
者は手を揚げよと言はれたので揚たら
四名だった此の四名というのは今少し教育
不足なので次回にする以上と言われた

四、西集部隊編成　部隊長清水小佐
先に南始めの事で　班毎の迎へ話に行った二人
その班員は全部居なくなる　俺は皆んなより
まだ一年若い心ぐす戦地へ行かなければ
ならない又金々知らない部隊に入らなければ
ならない、戦友と一緒に行きたかった　話をしたら
原班長は俺も今回は編成には入らないかった
俺の征く時は共に行こう「軍の命令なる曲がる
ものではない」と言われた、戦友は今一度
北海道へ帰って見たかったな」と良く演習の合
間に北上川の堤防で一ぷく休む時には話して
いたのだ　海から北上川を上ってきた1Kmの辺に
兵舎があった舟は其辺につないであった
此の川は水の流れはゆるやかなので下度石狩川が
石狩平野を流れている様なものでこの川に入れば
鏡のようで走るかの様であった
我々の舟は如何にもゲーゼル直立四気筒水冷
エンジンで小発動艇と大発動艇があり
共に敵前上陸用舟艇で兵員物資の
輸送目的の舟で当時我々は軍の機密に
なっていたので舟は云えより　俺等も当時の
写真の一枚もない（外泊した時の写真が
一枚あったので表にはそえてある）

上陸部隊を乗せ沙浜ぐんぐん近くになると
錨を下ろしウインチを伸して達着点員を
上陸させ錨を巻いて舟は沙浜を離れ
次の行動になる　大発動艇は前に進み
がありて之を用いて兵員物資を下す
北海道の冬中育ちが突然舟乗になって
心配はあったが　後へは引けず覚悟して
いたが　俺はまれな事に外の者は舟酔
する者多かったが一度も舟酔はしなかった
右舵は「おもかじ」左は「とりかじ」軍のハンドルは
二回転半が舟の舵は一回転半である
艇長からスロットル回転数ノース30度イースト
「オモカジ」で言う事が舟は右に回をかえた正規の
角度以上右向くから早目にもどす　事も
遠ってブレーキがなくて急に止める時は入り口
を、反回転する　舟は此の様にまとまる
無風で波の無い時はこんな静かな乗物は無い
而し荒波になったら沙浜に達着後引
返すときに錨を巻くと舟はバックする
大波は後からくるので波は後から前まで
飛び越える事もある　航海中言われて

また上官も陸奥もなく此の時の指揮官は一等兵でも操縦術丈等となると実に指揮官になるってこんな役はないんだそうそうこうそうも此の舟は不舟だから沈まないぞ舟から離れるなよ」真の大声を聞けば力強くなり頑張ったものだ

松島へは毎日のやうに演習に行った塩釜海岸で演習松島を通って石巻に帰ってくる 此時松島から遊覧船で塩釜海岸を見た彼の砂浜海岸は少しも無かった

松島五大堂の松の下へ舟をかくして陸軍海岸旅行訓練をしたものだ 気候が全部気地に行った後俺に外泊があの事になって呉会は部隊がまた後はかんとうそうだ一週間の外泊は思いもよらぬ事なった 田地は北海道より厳しいと思い家へ帰った 途中姫川の着光台(昔の演習地)を歩いて鷹狩へ向った 第七師団の兵隊が芦原で芋を頭に付けて演習をしている俺は教育が終ったばかりで 今に赤い襟章を着けて北海道の兵には不思議に思った

のでは、なるの　私も更のつたのが　北のもは
多久出身の下士官でも　仲々外泊など
出来なかつたと　云う噂に思つたのではなるか
合へばみんなの後より上官、将校なんか立止つて
敬礼しなければならない　何度か呼び止
められて何処かへ行くと言われて　十五、六
外泊の事を言へないもうやまれた

召集兵が入つてきました　乳地へ行く部隊が編成
された　教育班長の原さんも加はつた　東京の
出身の宮井さんが此の時から俺の分隊長だ
最後帰る迄信頼出来る人となつた　俺が後輩
ともから苦情が勉強するのに東京へ行く様
になつたが　知人が居ない　宮井さんも初めて
一ヶ月も世話になつたまゝである。

真の後部隊は松島の遊覧船のつくる所より
二百米も離れている　高い所にある大きな
旅館に入ることになつた　二階から見れば松島
湾は大平洋へと拡げている　五百畳も広下
にある。

三、横浜八戸間

現役の部隊が出発して留守部隊が編成
されこの部隊に入る事になった。当の兵隊さん
右翼分隊長で勤務やがて横浜から書森準
の八戸の数え港へ航海演習となる
我々は横浜市内のある四階建の学校かと思い
はいる連物に入った一ヶ月間此処で東京
湾の演習八月の横浜は暑くて松島とは
気候が違い北海道出身者は寒がれ
夜の点呼が終ったら屋上にあがって星を
見ながら腹に毛布を巻き寝て朝になって
室に入る。迄の間小学校があって子供等
がくる可愛くて話しをすると歯切がうるさ
さうだが大都会の子供だなと思った
面白い話しで小僧と言ったら師団に
も知れない地方で小将と言ったら師団に
二人しか居ない旅団長だ此のあたりの子供は
我々から見れば可愛く無と変な感心
もさせられた
又同じ四階建もある病院
もあった夜になると病院の電気が明るく

一室を隠してある若い患者達もピンクの下着で寝てゐる。誰かが言ったら次の夜から上着も来ない。屋上からも光景、病院は三階上からは丸見えゐる。そこら白真暗闇暑くて窓は明けぱなし。巡廻にそれがカーテンもしめたり明けたり風にまくられたり大さわぎ一ヶ月もゐるものだから。声は聞えるが姿不明。其の内に誰かが手旗信号をして手で送るそれを見ながら勉強して送ってまるやうになったそれで文句い手旗信号はすこおぼえやすい。良く松島もあたりでどこの砂浜でも後等う舟はつく事がある。古宇兵になると勿論兵教育などで何事も同じ事をしてゐるので決の人々は島に住んでゐる人等とは親しくなり得る舟で通ると決から島の蛇をとって手衣をふって信号してまる事も度々後等初年兵には わからない。悪口かも知れないがかって真違いが起きた事もあったとか兎に角俺達北海道は内地人を見て俺達が違れてゐるのか内地人が悪いのか特に都会者とわ、そうでもハンテーがある

石巻あたりを 日既にみちたる女の叫は
駅はてして驚いた 北川の駅間の話のうちて
指名遠のうちた まで入室したう 初室会には
ぶんはばたらめと聞そうしたが 人当りの悪は
これた 手続は全部検疫内容の高いすの又
女からの手紙かも 人以外のものは手に渡ってな
かった 妻が面会とおたう旅館で 泊まれ
話しはそれたな

俺達は東京電夜間演習で 航海しよ
うたら風も無く景森な風景のしたと
思うたらこれが飛業の大騒で夜の海へ
ハチと落ちた 又横浜から夜あたり海から
見たら何処を見ても電気がつそうして
所に連ってきまうた事もある あるもの
東京湾や横浜辺は まるな と思うた

愈それから日書地へ向って航海
先つは東京湾を横切って房総半島の
先端のある港で一泊
次の日は半島を廻り九里浦を左に
見て夕方 利根川を入った 利根川は
大きな川と聞いていたが 真の川口の

やまと丸の通る道はいつもよりなお
右に傾斜があって上流に行けば行くほど
のぼりになるように次の夜が明けたら大荒れ
今日は出発延期真っ赤の日も出ないなあんて
と思う三日目の朝風はやや おさまったかの
様になった

銚子

出発は決定されたのをまた うわさの大きさ
高さには驚いた とたんに思い出した 俺の
小学校くらいはあるなあと 今迄見た事もない
川口のうねり10mもあるのと思はれたが波と
違って此の山を含うねりは下りて含り
前の舟は山の向うでしばらく見えなく
沖から漁舟が帰ってきて「無線さん今日は
居なよ」と舟の上から叫んでくれたが
それには全くかまわず 船は大洋に出た
波は静かになった 波が無い時程平和な船旅
こんなうれしいものはない 如何が出来かこれも
小さな船団 横を走っている舟からは
中隊長が釣竿を舟の後ろに引っぱっている 何が釣
れるの 俺等の舟(やまと丸)の船頭さんが今度も一番
えらい人で兵隊さん部下に厳しい人だから

部下も少くなる　小田島等は平和な航海には
此の人の噂が本当に船全部がなるものにもなる
声は高し節は高し男振りはうるし男ぶりもほれぼれ
する人　とんな大きな声も上ンビンの音が他の
舟にはわからない　そうやっている内に午後三時
頃になって　なるが波が高くなってまた早く
小名浜港へ入らなければならなくなった
凡は日暮と共に弱くなってまた　満潮に
なってから
港の灯が見える頃には　波はたけり狂いだした
一刻も早くと思ったるが　赤燈台があるので
大ぶ近くなった頃には　まる湾暗く　国の前の
大きな白波が左から右へ　何枝も白波が
走る　驚ろく　それは満潮で低くなって
見えた　防波堤に波が乗り上　あれる時の
光景だ　一瞬遅れたら船は一度にこわれ
てしまう　平真達ら　危険一発丹は
方向転回　考えて見たら　港の灯も
見て急に　あまり操舵手が真達って
赤燈台を右に見て入ろうと左に見て
しまったのが悪かった　乗ろうと我々も習え
知そうたのに　人ばかり便り過ぎて

しまった　全員の名前を滝に入った
小さい四たろう滝は　兵隊さんなんのまた
事もない町へ　兵隊さんが行ったんだ　めがねを
もあって　又した観通ととってくれた　お花する
時は　国防婦人会や　青年団　小学生も　兵隊
さんで送ってくれた　小名浜から船島へと　海は
平和であった　小田上等兵の唄まで
かって我家の船島へ一泊して

宮古港へ向った　先づは途中の気仙沼に
向う　今日も青空　右に巻かれ北上川を
北上して何かうらくわからずが　水路の
様な所を左に見て　海を通って
気仙沼に行った　静かな気がする　此の港は
漁港で有名な港で　船泊隊には　多くの人
が入って居る　橋道とそれる事なく
俺が入隊して　思うたのは　右巻へ入隊して
見たら　普通は　其の地方の人が　地方の師団
へ入るが　俺等は　日本全国から　まちまち
なので　何か知らん地方に依って　人の気質が
違う事　北海道から九州迄　それぞれ　長所
はあるが　良く皆特とよくともつとも

気仙沼港の兵隊はたちまちになった
途中東かう所を回ったら舟がまったく
むこうしたなか 倚者の舟は水重造一ML50キ
あるのに舟ひとつで二三ぴも船のそばで
ピッタリとはねつけた 40cmくらいあった真のはは
細い水路を通ったのだ 船同志が衝突も
した 集ったら隊員がドンとぶつかった
ショックで水中に落ち 何処へ行つたか
居なくなったと探したら舟の前のつきでて
いる下に大きなものは此の兵は泳げなく
命のたすかるために水に入つたらそうだと思うた
非常をよろこび船員は水上では救命具
は絶対に付けるの 落ちます 必ず落ちて
まるので泳げない者は非常に恐怖になったよう
上からの波だけは上向になって起きられ
なかったと言うまでもない

教育訓練に練習に気合が入って上官に何
も言はず 実き落されるのまはあるが 手頃を
持ってるので これを二本まるめて殴られたら
すぐ痛く これらいつと思うといるが泳げ
ない者は 可愛相だった 何をするも舟から
離るのをしらぬ 又上手な漁師なども 急迫

をとばして落ちぶれてしまうやうなこと
があつてはならぬと言つて宮古港へ海上は何ケ年
着いたのは（海の）前と言う事）の
朝六時頃であつたので母が学校に近づいたら
ロープを持つて飛び上り舟をピットルとつなぎそれ
それをロープを持つて波間を探して母が前
に動くと飛びのくと、後へ動くと飛び
飛んでしまうから大ぶんとやつてまつて上つて
もらつた　陸へ上つて港の中を見取舟が通
つてゐる　乗つてゐる人の中に若い女のひと
のを見出だし兵隊に行つているお母さんの
人ひき綱張つているのだと夏の日焼した
肌は異つたのもしかつた　学校へ入り
今夜は夕食をもらうた　此辺の待遇も
大したものだ　青森向け婦人会編物もで
海はもうは唄はまうは大賑かとなつた
山田と冬が唄つたらあの人は本職かと大もて
此の時山田と俺は初年兵で遠慮そうするの
に二人の女に追はれ何か言はれはせぬ
かとひや〳〵ものだつた　終つたら三人と三人と
別れて民家に泊る事となつたので
俺等は五人が一軒の家に泊つた

朝の弁当を食べるために錨をおろし、昼になって明けて見たらどこの島かわからない。弁当は一掴おかずは一掴気持がよかった

昼時雨が近づいてきたと言うやうになったら三人が走ってきた。見送られながら艫をつけ出航今日は最終点八ノ戸に向う舟の中では昨日の話しで持切中には娘がどうとか来ぬ人のとか話しに花が咲きおのが加減うつりも入って話わ益々大きくなり今日は早八ノ戸にまたのこと一日も本当に早かった有名な海ネコ島100mくらいの島は黒で真白になった。すべてはと通り八ノ戸の数の港に入った此の港へ入ったら3mもある鮫を三匹づつもウインチで陸上へ上げる。民謡の八ノ戸小唄もうたくきく事ができた此の港はほんのかり寝で、すぐ出航した今日は波が高かったら波高くて港へ向って11日を入って来難所と言う時通路が一日つづいたと思ったら前がドスント下へ落ちた様な気がしたその後波が後から後から押寄せ前から波がドーット入ってきた波と一緒に後のエンジン室まで入ってきた船はそれ

てしまった 真の船波は前へ行った 舟の前が上った 舟は水が入ってるがやろうと浮上った 舵をおって深い所へどうにか向けて 港へ着いた 分隊に帰って頭の報告をして いたら中沢と言う内地から入ってる 召集兵の初年兵で アーと言ったのと 思ったら口をがバット開けて腕も足もビントも曲げちゃめ 固くなってブーと言ってる びっくりしたとっさに思いついた俺は 今迄一回テンカンでなをれた人を見た事があるので アそうだと思った 何や彼やと言って心配してる間に静かになったが 口がふさがらない どうしようと言うと皆がそれわ固くなって口が開かないたから勝かはづれるものだと言った 水のこわい話をした 結果になった 実はたら彼は水テンカンたったと言っていた 船泊兵が水テンカンでは 其の後は帰されたが 居なくなった これで横浜八戸団の演習終った 八ヶ月で一ヶ月余りリンゴの産地なので貰いに行って 皮のまま おやかう七ヶ食べた 今でも美味な事をしたと思う

父、二回目外泊

昭和十九年十二月今年も残りの時に外泊の二回目があたえられ泊まるのも終りの心をわすれようとしたが三泊くらい毎で出来ると思っていたが三晩目の夜になって突撲撃隊が来るぞと騒ぎまた明日の朝原隊へもどれば北門まで四時間はかかる松島へは三十一日の夜十時迄に返に危ない

佐々なく夜の内にあかけようとし家をでた父は今回もう見れば何もされず今度帰ったら戦地へ行くとは言わなかったが親は子供の事をわかっていたがそれはなかったろうかそんな事を言っても親を悲しますだけと思って一切話さなかった

父はかりの駅まで送ってやると言うので二人でとぼとぼと夜の雪道を二人で歩いて田中でもれば未だ四時から電車があったが夜だから一駅迄四時間もかかる駅でることとしたら父に起こされた時間が無いのらすぐ汽車にのり出発した父は心配して気をはって起こしてくれた此の親心を思った時俺なんともだろうと考へた時は俺は一生忘れられない

五十年過ぎた今でも可愛想な事
だった申訳なかったと小口とする
あの戦争さえ無かったらこんな親不幸は
となくてすんだのにと
どちらか返事は十月三日夜十二時頃
松島へ着いた先ず時間内に帰った幾日か
過ぎ等は進級する事になった
陸軍船舶工兵二等兵理増繁太郎は
昭和二十年一月四日を以って等兵に
進級致しました此処につこんだ
申告致します」と中隊長に報告し
今日から女が二つに成った
松島に駐屯そして思の出に残るのは
瑞巌寺内に軍の仮設風呂があった水を運び
風呂を火を焚くわかす便壺に行くと
風呂はおそい二年兵が部隊の帰る時間
はまだあるから入ることになった僕等は遠慮よ
したが古年兵はお前等も
早く入れとなった心配だったが入った二三分
もたつたが外に出ると寒いと
言った全身から血の気が一度に引いた
飛上って上がって服を着たかわからん

部隊長清水小佐副官中根大尉
夜になつた 実に好になり 今日の隊長命令で
隊長の前に風呂に入つた者がいる 誰だ
と言う事だ 大変な事になつた 今隊の
数人で仕事に行つていたのはわかつているも其
も言はなく 自分等も入つたのだから隊等
に言へとは言はない 隊等も姿は見えて
いなかつた 飛立つた風呂の水が波打つて
いたと言う事だ 其の後毎晩の様にせめ
られたがとう〳〵最後までわからなかつた
俺も普通ならばとつくにあやまつてる
而し今回は俺も若し運が良ければ生也
するやも知れない一生の命をかけてる
軍隊なのだ 一回内地近くまで帰つた者へ
れば中隊長にそそ酒長達にそそすれば
支那事変に行つてそして実戦をそして
る人達の中では色々な事があつた
と思う 今私等が行く部下を風呂に入つた
事により其の後はどうすると、考てくれた
のだと思う 副隊長も副官も士官学校とか
大学出の将校だつた 実戦の経験は無い

外泊しそうで家から正月の餅をもらって
またのそと外出もしました時にでもと
思ひ200程離れた処の民家に頼けて
置いたのをも乳地その出発も近いので
すきを見て迎えて持ってきた。普通の兵舎
なら大変旅館なかそんな事がありました

愈々乳地へ行く日がきた。名古屋から軍用
列車で瀬戸内海を広島市の宇品へ目の
前に1kmくらいもあると思はれる大きな
三角洲の宇品島に記憶は弱いが1回
くらいは居なと思う。200程離れた所に
船泊特攻隊がいた。雪がちらちらと降る
に上半身裸で体操やマラソンをして
身心をきたえている。我々とは一段の差が
ある。皆年令は普通の兵隊より若い
今現在の高校2年の少年兵だ。持攻隊
を志願させられた志願と言う者は自分から
願出る事のように当時の特別攻撃隊と
言うのは志願する志願だった。考へれば
國の為に死に行と言う志願だった

当時我々の食糧は少なく、回復期なるものの如く
持久隊の兵舎へ行くと、残飯は捨てる
程等の舟と言へば今で言モーターボートと思ふは
良い、命からそれ行って見れば立派な舟のはな
なく、舟全体の四一五mmあるうか、中一mm余に
金具がもって敵の何萬七千の大きな軍艦を
沈める違かのある異形水雷を両方に二発を
積み敵艦の停泊している港え不意に現れ
必ず命中する所まで行ってはなす異雷に
は入りが付いているので水深三一三mの所を
自動に向って進む事となっている軍艦の
火薬庫にでも当たったどんな大きな軍艦でも
真の火薬が爆発ろう、艦は折れしまう
沈没する　此の舟は四一つをはぜて舟に
エンジンをかけたら回転速は調整出来ない
真の瞬間の六全力、舟を立るまで全速、遠い
ところから、所でエンジンをとめてカイでこぐ
舟をつなぐ　速力は五〇ノット普通の舟は
当時のノット軍艦でも二〇ノットは最高ろうと
思う、ノット、海里は約一mmと言うから
陸から見れば速く見えるに思うが波の鳥の羽
根を広げた様な海水が立ち舟は見へず

鳥の羽根なども見うる敵艦隊も来るなかろうと思うた

特攻隊出陣して行くことも見たが 全員見習士官の階級で 陸軍曹長 本当になろう一寸過ぎれば指揮になる人達だ 軍服姿の首に水色のマフラーをなびかせ 手には軍刀を持った姿は本当に頼もしく下った

りこしかった 行けば必ず死ぬが当然

六出航

四日の朝もあろうと思われる輸送船に乗って 戦地へ 何処へ行くのか 我々には勿論瀬戸内海を通って始めて見る美しき国 日本人なら こんな美しい所に住む人間も居るなと思った 松島は日本三景の所 俺等も幾たびか通った而し瀬戸内海は全部が松島なんと思うた 松島の島を小さくしたようなものだ

九州の門司港に着くと 髪の毛を切って 封筒に入れ親あてに名前を書いた之は全員が命令で書かされた 其の気持ちは書いたが一寸何を言うにも言えない気持になった事は今も忘れない

二、三日此処へて停泊した此の海峡は潮の干満に依って海水が日本海から大平洋へ又その反対という様に流れる甲板にまで見ると白波は門司だったのが下の関となるくると言う海峡だった

海海難を通り朝鮮半島の朝鮮は知らなかった海から見た又今の朝鮮の山は丹にも特徴なの家さえた感じだけが残っている

東支那海を横切って、江子江の中ほどまで如何なる化学の不船が三度で軍隊と物資を積んで航海するとわ全たく危なかった夏の頃米軍は除々に攻勢に入り日本軍は南方で島で後退や玉砕海軍の艦船は全滅の為めることとなって沈み我々の船も何時過水艦の魚雷攻撃を受けるやわからなかった船の上甲板の先で双眼鏡で交対で日夜四時で監視また俺は国と感がうろと言われて本当は機関士になりたかったのだったも通信の方も出来れなかった船内と言へば各ハッチは甲板から下迄の高さ三階くらいの所へ何段にも棚を作って之が寝ぶり寝

が入ってくる。横になったりすることはもちろんのこと隣りの兵の曲った足の間へ自分の足を入れるとまったく横たわることもかなうのだ。あちらこちらで座ったまま寝ることもしかない。それに今では誰もが疲れ切っていて、ゆえは臨床もいないから、寄る物を一切も寄せまいとする。そうして大部のシラミが二mmくらいの血を吸うために体中に広がる。私になることなく、全部にろうそくかゆく、痛むものがたくさんでかれないなく、これと何と言われない腹立しいのだ。そんな中で食事になると飯ごとを甲板の所から持ってまるうたが船は波に依って揺れる階段は甲板から下までかってくる。これが揺れすると両足が急になるとかってあべこべする命がけだが今船はとっちえかたむいたり自分で敬礼しなければ本当に危が割合ドンと降ってくる。降ったら降ったで寒さはなかなか寒かった俺はしなかった。

軍船には我々の以上陸用舟艇を四そうで綱って積んである。舟には天幕を張って雨が入ってなく、様にしてある中に

本船の中は あの state だから 此の中で 漫師
出もつるし 花札を 毎日やつてる 初年兵
はくたびれが 今降りかゝつて 吉事兵は 御筆
兵のあつても 使う処のない 少しの金と 面
けつそ 借りてはやつてる 陽ま込のかけで
敷拾人も 先まで 黄色になつて さすが大河
だと思つた 夏の頃から 海が時化(しけ)まだ
波は段と高くなつてまた 中食の時間に
なり 艇員の食事も 飯ごうにみそ汁持つて
甲板へあがり そのはず本船が大きくゆれ歩
けない これは今迄になく大波になつたと思ひ
二三歩行つて物につかまり 船の起きるのを
見ては歩いてやつと食の用のそばまで行つた 時 又大波が来て
四五名の船を 置き度近くかたむけて
しかし普通ならば次の波が来る迄に
直るのが通らなく 次の大波が来て
積んであつた 我々の船は 皆ひつくり返つて
二度もおかずに 海へ本船から出てしまつ
た 俺は本船のそこにいた 本船はかしが
かつているから 水面からは 多のとびく 込
んである 而してする事も 出来ない

俺の分隊の舟はと見ると　岸方のロープで
引れ舟は岸方のきそうて前がつつンく
となっている　ロープと言っても大きは六cmくら
いまるうで縄であるのが引れも
もう中には本船に移って居て居ないので
それが大変　小隊長はまだ若い二等キ
くらいの若井小尉さんだったが帽子もかぶ
らず軍刀も持たず本船の甲板から
流されまいと自分の部下の船に「こっちへ
寄せろ」と俺が乗るからと
どなっている俺は瞬間的に感じたのは
此の人は部下かと思って危険なのは
わからなくなっているかと思い今にも岸を
出ようとする岸方の足をはなすのだ
本船は波にもまれ高い時は六mもあり
下った時にもなるので小さい舟は
前後左右に寄せられないと言ってもいい
詰ったら二分隊の流された舟に乗り移
ることが出来た
俺は中隊の表現を知っていたので四十名の
ろくトに入り流れた舟と言うと乗っている

のは船団隊なので流されてはたまらないそこで
もやれば航海も出来るが兎に本船も危険な
くらいなので小さい舟は全く危い俺達の漫
画なんかに言はせると今回の本船も船も
操舵手は下手だったと船が大きいから
波を真面にそいた俺等だったらいい
舟にうつるからこんな波の切り方はしない
と言うこと

舟を信号をもって手旗で連絡する事になった
夏迄にはあの副官の乱暴の問題の中板大尉
がそはに居ると俺と一諸に本船
に居るからひどい舟の兵員はどうなる
のかと副官を言うのも無理もないことと
得なかった 波は相変らず荒くマストの
あかり見えるのも見えなくなる下から見
たら波間に入ってほとんど見えないだろう
本船が右左へゆさぶられはつきりの上は
再の何倍ものゆれ方で船の上でなく

海の上のうごき　これは大変なものだと思った
正午に離れた舟は時間がたつに従って
だんだん遠のいて　信号も出来なくなり見えなくなってしまった　遠くに支那大陸が見える　本船は危険をさけて　島影に錨をおろして停泊した夜を明かした　他の本船は真っ暗
なることなく通って行ってしまった
夜が明けて　波もおさまって　島影とか遠くの大陸かもまだ若しは陸そいに本船が沖に見るからのでもよいものはなかった
海底をしらべて見そなわった　二泊して待って本船は目的地に向って南下した　航海は何処へ行くのか　わからない　幾日か　夏で暑くてどうにもこうにも　其うちに
此辺は南支那の台湾に「台風」「颱風」と言う事だ　中の底りを
ふうて本船はゆっていた　陸には町が見える
下船荷上とれかとそなった　本船から我々の舟で荷下が始まった　第一番に驚いた事は
盗みのうた　俺等初年兵は戦争は未経験だ　古年兵は分隊以外が二回目の召集で已に
支那事変に就てまるる先輩ばかり

七、沈頭刻書

戦争はこんなものだと言われんばかりの逸る
毎日本船からの荷上何時もの関からか俺等の
舟の床下には年内の急迫から始まるらしく色々
な食物が入っている食物少なく腹が
へるので ある時瀬戸内海の舟の中で生ま
ろうまでを力こぶしてうまかった思もよる
町の中を通ってく役所跡の様な建物に入った
四中の様ろんなを一ぺんにやたなそのうに
通路を見れば食堂ある人口あたりに鶏の
そをむしったり前のついたまま ぶらさげている
食堂は油でとす黒く全たく胸が悪くなる
食事が始まった これからの飯は支那米
細たらく赤みのある冷飯になったらカン
になって着もそうでなくらいにやする こわから
わこんな生活が始まるのと思ったら之を
最後に俺の下痢が始まった一日二、三回は
普通になった医ム室の世話に成る迄も
なくあるらめ其の度何時も腹がぎわ
した其の後も直るともなく以上悪くも
なうなるので体力は以前より一段落ち
た様に思へた

食べ物も乏しい始末で敵上陸前前
なれど「日と時期遅れなるに四集部隊入ってくるので戦争の第一線ではなく後方輸送が仕事となった これが現役と違って敵弾を目の前で切り殺したとか 剣と銃とかは見なかった
沖縄から慶良間の間を沿岸に立寄りながら航海したが 舟は岬から岬を廻って
爆撃をさけるのに夜より走れない事のB29は舟の走る道を知ってそして夜でも舟の通る道が一番危険なので 舟が夜走ると夜光虫と言って久うりの廻転にようて海水が泡立つ之が何拾mも尾を引くので飛行機から見るのだそうだ
爆音に注意してるが ハッと思った時は夜なので黒い大きな影が頭上をかすめた移な感じがした 夜光虫を出さない為エンジン切って舟は浮流する爆音が聞えるはるか遠くに行ってる 此の時間は本当に恐ろしい抵抗する事も出来ず逃る事も出来ない髪の毛が立つ 北部開が安全になると言う事を聞いてそうだが ろう言う時は本当なんだと思った

誰も声は出さない 頭の中は皆同じ 見つかって
ならうとするなりとなった大丈夫と思ったら
陸に向う「金達」と命令があたりさな舟の
エンジンは力のあん起りまつうからは火を吹
そのかれた引き返しますしたらおしまい
ある時も航海していたら 暗い夜なのに上から
海へ光が飛んでいる ハテト思って報告
舟はよったら爆音がする 日みだ上を廻り
なおから「夜に向う光が飛んでいる我が
軍の舟がやられる 俺達より先に出た
三中隊の舟機だなその事なか俺等の其処
へ行けば只今なにになるだけ B29爆撃機
は腹には爆弾を満載機関砲を上下
前後左右と本体は動かなくも空中
戦はまるのだて言う事だ下からも小銃や
機関銃では急付なく近くでは来ない
スリッパを履きがをかんでいて爆弾を
落とすとか 戦争の初期に日本航空隊
なども南方戦線で活躍していた俺等が
安にいる時東加出身の飛行隊長さん等
敵機二百三十機も落して加藤軍神と言われ
最後に戦死された 其の人の生家を見にが

おかみさんが行った事がある今の東北川駅の
三等米、永山方面の水田農家だったと思う
軍の兵隊は並々ならぬ事をしてきて日本軍
とは相当の差があるようだ
ある時戦友とふたりで歩哨の交代で銃剣を
付けて歩哨に立っていた日夜の晩なった
爆音がだんだん見えてきたら又敵機も
下から見たら腹の扉は開いている爆弾が
体を離れたなと同時に落ちてくる風を切る音
なるや全く無気味とは此う音だと思った
瞬間爆発ドンもかんもあったものでない
連続爆発距離は二百米あったろうが
二人は身を伏せていた土砂が家の破壊が
下から上へ上がった 戦友が俺に向き大丈夫
大丈夫と言う俺は大丈夫と言ったが言うとう
したら左肩が伸ばされない右腕で言った
ら血が袖からたらたらとあった 友達は自分の
銃剣にきたえを感じて大丈夫かと言
ったのだ すぐ軍医の所で見てもらった
服をめくって見たらそうだ傷があそこる
通っているなと腕を上げられた
裏に傷があり貫通しているとなった

大変なさわぎや 薬や中を通されるはと思うが
傷口を消毒して通してくれた 包帯を見ていたら
軍医が見るなと言うた そのからわん人室へて
休みだ 両こ腕はほれてまて冷のほになった
らひざの次より太くなってこまつた 二三日して
軍医から来てくる天田谷隊長が又を見て
これはたいへんだ おのこな事になったら腕を
切断しなければならない 俺が内地から用
意の為持ってまた化膿止めがあるからと
それを飲んだ軍医のそばをこのうたか
見ると膿れは引いてまた三週間もした
ら一日一日良くなった 川のそばに入室そうた
毎日だんだんくなっていると六七本の男のうが
取つてくるがそうとのぞくまねでまねと
そうと入って来た見れば我に箱に飴玉
を入れていて買ってくれと言う事うこの
言葉は通じないから申をもつかしが見ぶり
そうして意味は通じるわが又これものそ
かけひろくをすることを知ってる子供をもら
めるつもりは更になが面白くて 銭をもって
これだけくれと言へばだめと引込るが帰らう
なへそんなこういうなっていうと言って帰らない

小さい船なると、それが可愛ゆく思えて
又明日また言うだものだ本当に感心した
其の頃、軍の用は危険なので支那のジャンク
をやとうて輸送をしていた支那人一人に
兵隊二人くらい、其の用は支那の用だから
飛行機は日中も平気でアンペラ船を張
って兵も支那服を着、蓑帽子をか
ぶってしまえばわからない。ゆらり〳〵と
海を行く色々順備して夜はえびの天ぷら
をしてくれて、食べたら又振りこんな
うまい物なかったかと其の味は忘れられ
ない。夜が明けて今日にも出発と思って
いる時中隊から帰る様に
言はれえでジャンクはだめになった
支那人を軍がたのむ時は妻子あり家のあり
身柄引き受けで当団はない人を頼むことに
なっている
陸に帰ったらすぐ航海の順備をして出発した
途中は快走そこは流に寄り夜になれば
又走ると言う航海だそれは此の広大な
支那大陸を実感したからと言って
小さい船にも日章旗が一ヶ分隊ひるまって

地方の港の警備をしている
前にもとった話しになるが、本船から流れた
舟艇は、外の舟もあの荒波を乗切って
支那大陸に上陸まで兵器はあるも支那
人の世話をなったとか、とにかく小隊長が
居てくれたから何日かして中を通った
日本の貨物船に助けられ上海へ行き
日本軍に入り一ヶ月程してから全員
が帰ってきた帰ってから初年兵が一人病死した
小隊長は中尉に任官し本部に入り
航海に出ず後等の小隊長は変った

支那沿岸の港には日本軍が一ヶ分隊でも
守備をしている。それを一日交代に服はだく
靴は鳥し地下足袋から足がまるでる
支那へまるから七年間日本へ帰った事
が無いと言ってた。それを聞き日本は良けるの
のではと思った。これは軍人として当時口がさけ
ても言えない言葉ではないが、町の中へまで見ると
まるすぐな道に女も子供も何かしているが
顔をもすとパタパタと両側の家の中へ消え
てしまう。勿論考えて見れば俺達は

軍隊だが、普通丹心をした場合暑くから
上半身裸が多い。逃げるのも当然だ此の
様な事だから時々非戦に殺される事もある
と言う。又ある時港へ着いてしばらくそこ
どの様な事で誰と話をしたか知れないが
舟のそばで支那人が両手を両袖に入れて
当然はだしで近寄って来たのでハッとしたら
バリバリの日本語で話しかけました。
話しに依ると日本の憲兵だとの事でこれ又驚
いた当然支那語を話せる色々な情報を得る
為だとかそこで治安の状態を見てくるのか
と思ったら頭が下った上官等と話をした
時には今夜は此の港で一泊となったから
支那人からの情報で今夜は何者かが知ら
ないが日本軍を襲撃するとの情報が入った
となると恐怖支那敗残兵軍と言って武器を
ある俺等は小銃に機関銃くらいで心細くなって
思った。見ると向お前等三、四名くらいと思うが
舟を守りに行けと言われたら軍隊と言うのは上官の言う事は文句なしに
金部命令で反対は出来ません
舟を止めている所へ行ったら古年兵が俺等

わ小銃のような而も手留弾は何拾発でも
ある若しその時はあわてずやるんだ敵を
近寄せれば拾人まで一発で殺れるからと
と、自信があったかどうかわ知らないなが其の通
りだなと思って心強かった時間がたち
夜は十時と過ぎなっても平静だったが
眠る事はもちろんでいたら遠で銃声
が聞えた、かわて用意をしてあるうちの
後ろに待機した、後は刀の方から前からかまわ
なしそばにわ手留弾が一人に二、三口発
やられているのに驚いたと人影
が見えかくれした俺等の所は小隊の
ある所まで敵が向って撃ち一名も
はなれるたび遠いと思う時打ち
合の音の夜う空に始まった夜う空に
閃光が飛び小銃の音もわなるなるなる
ばりばりと機関銃となると力強くなる
音を聞くとと小隊の方はどんどん進んで
行ってる全たく攻められる時は恐ろしい
と感じたりしたが攻めることなると俺もまて
行って多位はなるやと言う気持ちになった
が性勝が違うので指揮も見ることに

別な話しになるが航海する度小銃は備等
初筆点の銃はかり持あるくらいで天皇陛下
の菊の紋の入った銃が毎日の掃除で手入れ
ってもだんだんをひて来等迄になったら
どうもそうになるかと心配もなくなった
或る航海に出た時港へ入って港と言っても
当時中國にはどこでも日本の港の様な
ものはなかった金部が川大きな川小さい川
を利用して舟がある当時の支那は
上海だとか揚子江等には港があったが知れ
なが皆港の様な国民の港は外に無い
僅が見た所では奥取舟は一人でカイで漕ぐ
次に大きいのは二ハンク大きなアンペラの舟を
はった船次に大きいのは黒木船で小さい白い
舟をたくさんはって家族全員生活をする
マンがにもある海賊船を同じ船軍艦の様な
ものは見なかった
前に述べて母を引に入れて四つで学校
縛った近くに山やうがたくさんいた夜に
なったら急に空模様が悪くなり風が強く
なってきた其のうちに舟の石一つが動いて
危ないと言う事になり大きな木を今一本

話すことになったが、Mは真暗闇で海から
上潮で波が岸壁にぶつかりだくだくと
走っている 誰かの口ぶりを一生忘れてくれない
ひと言葉になった此の波を真暗な中を
知ることはあるが自信ある者はこない
と思うと渡辺金太という初年兵が
俺が行くと言った 俺は渡辺の泳ぎの達者
な事は知っていた 舟から見ていると頭を上げ
ては泳ぐとこで息をとっているのだ
聞いたら「わたのしだと言うためでびっくり
した事がある 大いやつが向きされた波は
前を蓋くなる 渡辺は口一つもかつがアッ
と思う間に飛び込んだ しばらく無言
が続いた 真の闇の時間はいつまでも長い時間
になった 闇の中から「出ました」と聞えた
丁度陸上には守備隊があるので「守備隊へ
行け」と班長が大声で、たしかに了解の
返事があった 気持ち波は又々荒く
なった 舟が左へ右へ口一つを切って舵を切る
強風の時はエンジン全開でかからなければ
流されおられて舟は西へならない ちょうど
うちにドスンとぶつかったお卵のつなぞ

ある舟にポカンと穴があいてお前人が
大騒ぎしている此の舟につないでやろうと
思うて二人で飛び移りロープを縛ったり
舟と舟の間は五、六米もつたり離れたり
上下している 古舟が出て来て危ない舟を
よせろと言う事で全員で口一つを引いて
舟を寄せてくれて自分の舟に飛び移り
再び河の上流にのぼれる事がありました
別う航海の時も山口を入って鏡を下って
舟をつめ夜走っているから眠ってしまった起きて
見たら屯潮になって舟は沖の上にデンと
並うて時間迄に来ない事もあった

えんな事をしている間に俺も☆が多つの
上等兵迄進級した 古年兵で☆二つの人の
言う事は三つの俺が言う事も聞かなければ
ならない 俺より新しい兵隊はつよいから

八、終戦

最近新聞紙上には、連合軍が沖縄へも上陸したと聞いたが日本軍は不利な報道は一切知らされず、又軍は上部大陸には一億の我が皇隊が陸上戦の訓練を時折やらされていた。而し大陸からも日本の土には行くことはないと思っていた

終戦を知ったのは次のようなことを思う

部落長から話があった話の中には、どうか勝手な本へ方をして保証を取ってくれますなと繰返し言われたもうそうなることは一応上官が人間と人間上等兵と階級章は家へ帰りますがつけていたと記憶しますが、何かなすから敗戦なのか

隊の中には演新不服がかもしれない

本当にそう思ったろう舟はある海辺もあり会社もあるが兵隊さんが沿岸航海はおよそものの一千円もかうたら海越やらずに日本へ帰れる事が出来ると話で意見があった終戦は知ったが話合で日本も承知したのか

四名はわからなかった
名に関し日本は昔から武勇に優れる事が
無く神風が吹くとも勝つとも予想の時
から数へられて居た、況に優れば男は
去勢処は逃げ道具にされるとあおられ
て武勇なくなってまた 実際には部隊長も
其の後の事はわからなかった
後者の部隊もはどの様な振り知ってとの
指令で行ったかわ知れなが広東の
本部へ行って部隊の今後の事を相談
行ったものだと言ふ話しあったが其の結果
真の様な部隊は知らないと言われたとの
事だとそうなっているのか此の部隊もは其の後
我々の前に最後まで現はれなかった当時の
状況からして部隊長も大隊員の命の
責任ある人が一人で歩くか殺されたか処遇
なかった 其のうと俺等は甲板又厨が
九州の鹿児島から汽車に乗ってまっすぐ見て
くれた
我々は戦争の終った南支那海を日本の方向
と反対に何はるかうって香港へ向った

我々はどうぞ当港へ揚陸となりたく
行く事になったらしく 思へば 此の
出港も終る迄と思へば 色々とありた
支那の当時は 普通の国民でも其の日
の食物も充分無い状態で あの時
町中の家で食事をするのを見たら
野菜の葉を煮て食べて居た 兎に角
生活は実に苦しい 毎日の様子は食事
をしたかを言う事だとか
赤痢に罹って いれば支那人が十町くらい
遠巻きにして 立ち止まる 何時迄寄た
か知らぬ間へ 二三人くらいは 三米くらい
なって立つ 物めずらしそうにするのか 籠を
一ケ下げて 三時間も 立って居る
大人や小供も皆はだし 何時の間にか
股を近寄って 終には 三四人くらいまで
近寄って来る 吉等に聞いたら
それは危険だ 前にも群衆が近寄
って来て 兵隊が傷にされた事も
あるとの事 時には殺されもしても一発
ぐらいはなくては 立ち止まらないと
言われ

やっと五六本ずつ入るほどまでがチンピン拵で
両方にかごを下げ 客をそこへ乗せるもの也
駄賃を十四つを拾ってすぐく
牛の糞をどこでもよろしくまるめてそれを
家の壁にペタンと張り付け乾いたものを
は焚物としている 話しかける
又そうかと言って 上流社会を言
へば良い家に入って服装をうるく
みんな靴をはいて美しい娘もいるが
金部が足を外聞をで歩くともかむ
と股を開くがつのりだが上流を
下流の生活の差は大きい
日曜日になると日中は33度並通になる
す足ははコンクリートの上日熱そで断対
歩けない 女郎人は山から出のから真の裸に
そで歩いているので足の指は開そうする
外の者はうらく残飯を集めて之を
先躍物を持って何処えか行くのを
まで追んでまる 金はいらないと言って
いたが不けるだから 俺は何時も日本人が
商売をする餅屋さん 元行って餅を
買って食べ熱いお茶を何杯も呑む

暑いのに熱いお茶を呑んだら汗は流の
如く流れる 其の後が亦体の中から
涼しくなって本当に気持ちいくなる
明日必ず御馳走すると言う前日は共喰
にこうした 夜になったら 女が一人づつ
四人も話々に逢 そしてくれと言って
まだが仕舞迄全部追返した
俺は理解がない人間だと言うか
国處を越えた男女の仲と言うか
を考えずには居られなのだ
中國とも領ったた日本兵をを敵國軍
と思うそうる支那人がなど日本人を
親うかと言う事は之は國と國とは
敵でも生きそうる人間と人間は
どこの國の人間も同じ平和と安全な生活
そうして幸せに生きると言う事を願って
いるのだと思へば今更なから人と人が殺し合
う事の戦争と言うものを考へさせられた
戦争は終った帰れるが 今後のことはわからない
なっが 兎に角現在は元気で生きて
いる事は確かだ

第一線の部隊でなかったから
戦死したものは 部隊で二十名も
居たか 負傷者もいたが大した数
では無かった
屍に機関砲の破片が入ったりと痛く
と言ってうつ向になって尻を押えて
連れて来た兵を見ても
大きな負傷で 手や足が無くなる様
な怪我なら 一発爆弾の直撃を
受けて 後方なく ろう飛んでしまう
方が良いか 外の召集兵さんのように
妻のあり子供のあり まる人とは違う
第一家もある事だから心配は後は
無いと思う
俺は今迄人生の将来を夢見て
軍隊で出世しようと思ったが
根本から七四になったが今となっては
何ものくて元気で帰る事が何よりの
目的となった

戦争と違って日中飛沫が出ます
最終点の雷撃の近くになりますと 大きな見える
山のような島それが近づけば又島 大小の島は
皆山のような形です 島がありまして 海の
波はまるでなくなるくらい静かな感じます
港だと思うところは爆雷を発射だ い私で
最後空で水面から何拾米の所を飛ぶ
無線が入ると我々を見て飛んでくる
なかなか皆いまだ 向いてくるが 意味が
ようだ 何時場合によっては うたれる
やも知れぬ助かる為にまた我々だ
自爆をするとまた言いました 俺は自爆を
立てる軍隊に入ったおぼえはない
日本軍が白旗降伏だ皆固く思ったら
らくだ 身の安全の為敵方が無いから
やって皆壁に着いた 始めて見る
イギリス軍が陸上にいた 喜ぶ為に沢山なりから
多数見えるが 武器を用に置いて
一人づつ上がってきます 手がなくて 真の通り
上陸した 一列になって 岸壁に 海を背に
後ろ向きで 一ml 一人 上ったら 銃剣が胸に
一人に一名の英兵の銃剣 何とも言えない

話もわかるようになりました。英語をおすすめします。
また儀正しくなりました。話しては通じません。敵の降伏の
願が一度に好意的になりました。相当な相当の
警戒心があったのだと思います。あなたは
すぐ北海道が寒いと言われますが
いえ雨とばかり知らず此の魂で報されるとは
思いたくなるつよく話が通じるか武器を持て
町のある建物に入った。此処は孔誌と言うの
ひとか。普通と言うのは四つの島で見れば
高い山のすそに西洋風の高い建物がたくさん
建ちならんで見えた
日本人の事たくさんあるから此処で生活となるとは
色々順序や整理に何かと忙がしかった。一週間
くらいとと明日から住居が変ると言う事
こんなに言葉をして逃げたのにと言うても
駄方なく、真の次の汽は三泊したら移転それ
も今日の内にいるは三時間内最終回の時は
三十分で出ると言う事になった。外にいて
知うれたいと四階建かけ上り元和へ
荷物をくるみ下りてまたらもう下から銃剣
もったやつ等がもってまるやうな事で
陸の会場なども大事で置かせて

急となってしまった　之は役等の敢然号にする
予定で　命令は取ってしまうと　命をつなぐ
だけとかくれないと　力がなくて　反抗も出来ない
これが役等の目的だったようだ　其の頃は
もう武装解除されて鉄砲も刀も無し
一日分として与える食糧は一回に食べる時八分
と言うと　三等分して食べる　一日もすると
補充うことなくなってしまった
其の内に敵の使役に出ろと言う事になり俺等十人
で大きな倉庫に四角に積むためコンポにして
ある古雑誌のつまだ　之が重さが八十貫程ある
俺のへつてる我々二人でこのしてまつつんと返せば
次又つつん返すから兵に剣が今にとつくかのやう
其の時の英語は今でも忘れない「ニヨニカモン」
これはかり「日本人早くやれ」と言う事だと
汗びしょりになったが時間は短かく其の時は
二時間ごろと言う兵営があり隊に帰り一番
始めの方だそれ営内を駆けて回ったので治し
たらお前等もあまり本当の事を言うな
明日のち交代で外の者は注意に出されない
のだからと言われたそれからは毎日交代で
好るから如何のたつ兵全部あてしまったが

まる人間を殺して来た始めは此の様で
あったが二週間も続けそうそう銃剣もにん
やまず顔色も大分良くなった いまイキリスの
顔でも良い顔と悪い顔はある
基隆俺は四地で二回目の松島からの外泊の時
父に話して買ってもらった短刀を武装解除
の時あまりおしくて刃の分だけ持って来た
が若し危険品と思ってマサリでなくて出がまう
とったがかくして通ったが十の中に埋めてまた
丸補充教育所
其のうちに日が過ぎて連れて行かれた
所は補充教育所こゝからが真の生活
ところが米軍でところが英軍か我々は区別がつか
ん香港は全部が英軍而真の中が黒い軍は
印度軍北の牧場所はかゝは銀等が白本軍
に入ってきた所真此へ今度日本軍が入れ
られ銀等に監視されてる飯さくの外は
印度兵 黒い顔白い顔は先ってるがそれが
面白い 真の後は連れ便所迄連れ
て行くのは印度兵三人程で三人くらい連れて
朝から晩まで 又手後の者と交対でだんだん
お互いが顔なじみと言えばおかしいが

学校の保健室の先生、人数を調べるのに大変
四列に並べるのをまるで調べるように
わかるよう、それが済むとわかっているから当然
調べる時中で動く人前と違うと時間
かかるが始まってから終るまでは
一刻して調べて納得する 役者は二の次で
三十人もそろえて三十人へれば良いという
訳と細い川のどろどろくさえ臭いに行かされ先が
スコップで土を上げると水がわらわらと落ち
大会のたとえ思ったという彼等も毎日の事
から安心して臭気もだんだんうすらぐと歩
き出す、まるで海辺は、時から見向けて
乾きつつある大きな石に腰をおろして休みつつ
中から、わからない、そうそう監視の監視す
る見張をしているまたそれと言えば土に
水をかける来た時には仕事をしてそこに
穴から水が流れ落ち土は全てあげた
ばかりのようで高見な顔をしている
時間かまたうとほぼと連れられて帰る
途中は機がへりすぎるくて前の者の歩く
足より見る元気はない帰れば コンクリートの
床の上に先輩一枚ひいて寝る 当時

丸龍の街は英国の国境で道路は全部
神様がきれいて青いもの口に入れて下さいもは何
も無かった
今月こそ毎日体の検査のある課のない整列まで
ほとんどの者は痩せて目は引込み肝臓も悪くまる
捕虜と同じかっこうだ 列に列んでも見ると莫の
栄養状体はよくわかる 持ち主は調べられると
拾ったと「たばこ」紙に巻いて吸う人の拾ったのを
自分の食物と取りかえる等そこまで者だ
大そこまで者かある お前は何処へ行ってるかと
聞くと突然会う為か豚を養うってる所が
あるそこへ真剣の仕事になれてるから指名され
るのか毎日行ってる者なとわ大そこまで理由は
わからかな 兎に角色こまな仕事にあきれ
それによって体の調子が変る
又あるは英国の兵舎へ仕事に行ったら我々は
半分位のまでやるな地下足袋をはいて
いるのにつて立派な履物がなくてある
動かなかった足に合わなくて困るがそれを
半数のものが持って帰れ列は列はみれ
はった者は金員出かされ帰ってから副せよ
と言う事になったとか明日から副せと言う事に

仕事に出されるひとまで集まって其の分出される
者はどうなるのかと大騒ぎとなった
此の様なことわたくしあって書きました
印度軍の兵舎へ仕事に行った兵舎の前に
よごれたものが何かを燃した後の灰がトラック
に一台分程あるのを見てまいりました
バケツに入れてラングン一杯で前後に灰を入れて
二三すれの処まで運んだ事があります
休みなどがあるとすぐ兵隊さんが兵舎の中へ入れ
られて仕事をなさるとのことでした事に日本語
でられには驚きました二時間くらいであったが説教
を聞かされて其の時話しては印度ひはお坊さん
になる修業をしなければ一人前とは言わないとか
日本のこと当先の神武天皇はひげがこいだろう
あの人は印度の人びびげがくいんだ
日本の人は印度の学校なのだ仲よくして行か
なければとこんこんと話されて有難くなって
帰ってきました

九ノ一

今日は昭和三年一月元日、遥かに北海道を思い起こしみんなはどうしているだろう、正月のごちそうを食べているだろうなどと思うと好物もやけるそばになって真裸になり外に水道があるので頭から水をかぶった。満洲の一月は北海道の五、六月頃の気候だ。夏は暑過ぎて野菜など取れない。

ある日午前中急患があったので午後になり急に腹が痛くなり下痢が始まった。夜になったら一晩中便所はわからなくなり、その内の患者で満員、トイレの通路も便器が並んでいて使えない。一日も早く病院へと思っていると先客が多かったが中々入院出来ない。四、五日は何も食べずに横になっていた。

皆寝台に寝ても苦しいから何もしないし紙屑やこみが散らばっているそれを衛生兵がまとめて便所へ捨てる。最初のうちは患者をなるべく☆の二つの兵がそうなったら三つの

権利が着々と驚かされていた　順々順番
がまって入院することになったは嬉し
かったこれで助かったと思うた　トラックの
荷台に乗せられ二十分くらいだか兎に角
トイレ通いが本業なるのだから手拭二本
を縄のようにして又はさんで入院と
なった入院したらトイレは寝台のそばに
あった木の箱の中に入れてある
それが便器　軍医について　お前等は何も
食べるものは無いと思うが病院外の
物を口にしたら帰れなくなる事は
真違いなしと言渡されたが　どうぞ
なって才元温がオカ温にと一級ずつた
食事をもらうての生活知らない兵隊
ばかりだから　其の時だけは俺も上等兵殿
と言われた　変にくすぐったかった
兎に角薬も充分に無いから食事
療法で危険な病も食わずで直す
お陰で弱々ながら元隊に戻る事が出来た
其の間約三週くらいと思う　俺の入院中に
隊は豊名ち和軍の馬を養成する便事に
言うていたとの事だった

とうとう帰還の話しが聞かれる様になった
我先に帰り度いものが誰も同じ日本の
支那に居た陸軍は中国の奥地からでも
何拾日かかって何百粁も歩いて海港へ
集結そうする俺等はそれを見て自分等
これでも幸せなのだと思った 運は行軍
たものも突もうたと思ふところまたのか
朝鮮半島から半島人が日本軍の先に帰ると半島人
入ってきた 終戦と同じに彼等は
俺等は敗戦国の日本人ではない
一刻も早く日本軍の先に帰ると半島人
は日本人から抜け駆けして危険だった
我等の隊も人員を制限されて帰還命令
が出た 其の時馬須さんと言う俺より三月後に
入隊した初年兵が帰る事になった 俺は、
先に帰るから着のみ着のまま家へ知らせようか
と言ってくれたので俺の状況を話して
これを頼んだ 出征以来生死も所在も
不明なので家には爺ちゃん婆ちゃんもいる
元気だろうか 親そうそうたるさんの兄弟の
事を思うと一度に帰り度い気持は
強くなるばかりだった

其の後我等も許可の出で たちまちの部隊が手を申して船泊隊は早く帰れると言う話しは前から流れていた
英国の船だったと思うが之に乗った やはり三千percくらいあったか 船はたちまち港で舟から舟へ面会をする女達の公園のボートのやうなものさな舟がいる中を
港を出た夜になった 隊員らは真達なく走っているかと見てまるかと言うた俺も甲板へ出て見た俺等は夜の星を見て海を走るのは本職なので 舟はどうへ向くるかわかる真達なく一度で暗い海を北へ進路をとって 航海している 幾日過ぎたか右にのすかに見える沖縄の島 日本が近くなった心は躍るやがて 出発したのが二日もたったか九州が見えてきた船は真直に鹿児島湾に入っている まだ見る景色なくのに船は一まちの所で止まる
町がそこにある 一まちの所で止まる
両ら今夜は上陸出来るよ 其の夜の船の中は眠つていた者は居ただろうか

ゆう日は 迎えも 駅でも 貨物列車が 待って
いた。真っ黒い馬車に 白幕を 張られ
ばらばらした 最後の 会議が ハンドルを とって
自分の 頭の上に ぶら下がって 満員電車の
中のように なって 一つの 口は ロープで
落ちない ように して 部隊長や 中隊長の
挨拶も ろくろくは 何も 聞こえない 札幌の 人も
居なくなっても 復員を 始めるような 降等の
分隊も 心もとなく なる 俺は ここまで 来たら 別れる
者は 今の内と 営門前 右の 世話に なった
なかまと 食物の 中から 餞別を 出し合って
とって 置いていた のを 最後に とっておく 渡そう
と 思ったら 取って おいたな」 それは
とうとう 頭を あげて くれた
汽車は 札幌を 過ぎ 苫小牧から 客車に 乗った
関門トンネルも 無かった 大阪に 着いた
此辺で 又 乗り換えて 東京へ 汽車の
中は 人間と 人間と 荷物を 持った 客 復員者
窓は 破れて 風が 入る 満員列車の 乗降
口から 乗り降りも 出来ない ので 窓を
破って 入る 各車時間が ある 小便も
出る ところが ない 復員して また 海軍の

やの等が殴り合の喧嘩になった、猛吉は
わからない友達で喧嘩して馬鹿だなと
思ったのに次の日になったら話しを
しそうだ、東京に入ってきた殴られて爆撃の
跡が見えました東京出身者の顔色には
殴ると変ってました上野駅に着いた
待時間が三時間くらいあったので駅へ
あっち見ると雷市と言う所が出ていろいろな
ものだった 思うまそうな饅頭があった、
うまそうだ買って見たら普通のうまの皮のむ
た塩漬だった 東京の試食なそはどうだか
家族はと考えた時俺は北海道でよかったと
思いだら青森に向う汽車は全車とも
相変らず満員列車 何日も過ぎたので
もうたカンパンも少なくなった、青森迄は
行けるなと思いそれから先は北海道食
はずだけど何とかなる 東北本線と書る
車中にて後頭部が声をかけてくれ
話す事が出来た、青森に着いた、
完全に世界は真白、真の駅に立てば

実そうで敗方かなど　其処へ彼の人が入って
来た、他にも北海道へ帰る後家さんも居
たその人は函館へ帰ると言った　昨日話した
人に聞いたら東北刀も再と言う事だった
俺は鷹和だよと言って　再日森で
一度に又こなど　彼は北支だったから
捕虜になるなかった　支那は勿論力が
なくて日本軍を捕虜には出来ないなどと
言う事で食糧は米を持って居た　帰
れば家は農家だ心配なくと　炊いて
食よと言ってくれた　而し燃すものが
なく　とはいえそっくりと言ってした　彼が
持ってきたのは駅の壁板をはがしたと
ものだった　見れば壊して焚いた跡が
ある　飯をそこで飯を炊いて食べた
外になにもなく　而しうまいもの
帰り北海道への連絡船少ない貨物船
だった前に何回も来たある大きな
連絡船は何処へ行ったのか　出航した
船内は寒も無く電気も消えた
真っ暗だ　函館へ上陸したら昨日函館
へ帰ると言ってした　兵は外套に首を

すくみてとほど何も持ちずに来る
階級は兵長さんだった おかしくなと
思って聞いたら 船の中は真暗だった
のに俺の荷物は全部無くなってたと
話した 乳児から大切に背負って
来た我々の荷物はどんなものも一生
大事にしなければならない財産だった
可愛想だった
腹は満腹で出発して 知らぬ着いたら
午後一時ごろだったか 此のまま鷹栖へ
行くと明かるい内に着くと思った 人口通
りかはつのごと 出征する時は 山ほど
からたくさんの人に日の丸の旗を振って
見送ってもらったのに 今荷物を背負って
刀も持たずやせてとぼとぼと帰る姿は
なんとなくも見せられなかった
駅前に食堂があった 入って腹ごしらえ
をして時間を見てタカスえ向った
北橋を歩いていると隣の家の藤本さん
の姉さんに逢った 声を掛けたら驚いて
「もう帰ってきたの」と言って
くれた 家の者元気にしるかと聞いたら

十日ごろ前、爺ちゃんが亡くなった。
「逢えなかったね」と私は医者にまでそうかと
言われて着物台に向っていたら後から
馬橇がまた馬をよけたという。其の人が
荷物を背負った兵隊を見た時に傷員
とはすぐわかる。其の頃は元気で居たまうは
ポツポツ帰って居たからだ。
「何処から帰って来たのと聞いてくれて
着物かうもすと言ったら先っ馬橇に乗
りなさいと言はれ私は北成の理髪屋と言い
ますと真の人は土手張れ見の妹田と言うと祖母
なおらするとお田さんから家までは八粁
くらいあるのに又帰ってまいなさいや
なんて送ってやると言われ遠慮したが
家までまでされ休みと言ったがすぐ帰られた
送ってもらって有難かった。
家をたずね見たら電気は家中に光々
とついている中をのぞくと戸がはずされ
中には他の人もいるやうだ。おかしいな
祖母が隣さんに聞いたことはお爺ちゃんが
十日前のと聞いたのにと思ったが聞け
「俺今帰ったよ」と言ったら驚いてみんな

まるまって死んだ」と大騒ぎとなった
周りたちは婆ちゃんがとてもなつかしく
今日は終ったのだと言った、安堵はかなしみと
喜びが一緒にまじりあったような
もう少し早く帰れたらと残念だった
周りは、爺ちゃんも婆ちゃんも里願
そこからの手紙や兄ちゃんは元気で
畳焼かう近い内に帰ってきますと
安心して嬉んでくれたと言うので
残念な中にもそれだけでも良かったと思うようなあった
それは
昭和三十年二月十日であった

後の大東亜戦は終った 数日後帰いの
陸軍復員局也詰部とか言役所
現在の神社前交文美北の角(当時練兵場)
にあった
へ面会て復員手続き完了した

平成十一年六月三十日 七十五才記

理路整然郎

大東亜戦争史

昭和16.12.8.	ハワイ真珠湾攻撃
20	グアム、マキン、タラワ、島占領
22	ソロモン島上陸
23	ルソン島上陸
25	香港占領
17.1.2	マニラ占領
11.	メナド落下傘降下
23	ラバウル占領
24	バタン半島攻撃失敗
2.3	アンボン島占領
14	パレンバン降下
15	シンガポール占領
3.1	ジャワ島上陸
5	バタビヤ占領
8	ラングン占領
9.	バンドン占領
12.	マッカーサ司令官コレヒドール島脱出
5.1	マンダレー占領
3	ラッキ占領
7	コレヒドール占領

昭和17.	6	8	アッツ、キスカ島占領
	7.	6	ガダルカナル上陸
		21	コロンゴ上陸
	8	7	米海兵師団 ガダルカナル島上陸
		18.	一木隊ガダルカナル上陸
		21	ガダルカナル飛行場攻撃失敗
		31.	川口支隊ガダルカナル上陸
	9	16	イオリバイワ上陸
		26	南海支隊ブナヨ撤退開始
	10	9	第2師団ガダルカナル上陸
	11	15	第38師団ガダルカナル上陸
	12	8	日本バサブア島守備隊全滅
18	1	2.	ブナギルバ島守備隊全滅
	2	1	日本軍ガダルカナル島撤退開始
		8	〃 完了
	4.	18	山本五六海軍大将戦死
	5	12	米軍アッツ島上陸
		29	アッツ島玉砕
	7	29.	キスカ島撤收
	8.	15	連合軍ベララベラ島上陸
	11	11	〃 タロキナ上陸
		24	マキン島守備隊玉砕

昭和19 2 2 連合軍ニューギニア島上陸.
6 ニューギニア島守備隊玉砕
23 マキン島守備隊玉砕.
4 16 第1航空艦隊ニヒマ占領
6 15 米軍サイパン上陸.
18 グアム島玉砕.
7 7 サイパン島玉砕.
17 東條内閣総辞職
8 3 テニアン玉砕.
11 グアム玉砕.
10 10 米軍沖縄空襲
25 神風特攻隊出撃
11 24 B29東京初空襲
12 2 米軍レイテ島占領.
20 3 3 米軍マニラ完全占領.
10 東京空襲
13 大阪〃
17 硫黄島玉砕
4 1 米軍沖縄上陸.
7 沖縄本土諸政部隊壊滅
〃 戦艦大和沈没
5 2 英軍ラングーン占領.

以上

昭和20	8	広島原爆投下
	9	ソ連軍満州侵攻
	9	長崎原爆投下
	15	玉音放送
昭和21.2.11		帰還